
「概念データモデル」の適用性模索

- I. 現状の問題認識
- II. 概念データモデル適用にあたって
- III. 情報システム開発への思い

MASP 2011. 6. 14

桑山 卓三

I. 現状の問題認識

顧客とIT業者のズレ・・・多くは顧客側の安易なIT化期待？

1. 顧客側の問題

- システム要件がまとめられない/要件はどんどん変わる
- 経営者/IT部門/利用者部門の改革意識のズレ
- 核になる要件を絞り込めない
- IT業者任せ(分からないからお願いしている、工数がない)
- レビューしなくてGO(仕様書のレビューなんかできない?)
- 初めに予算ありき

：

2. IT業者側の問題

- 顧客に合っていない提案/競合合戦
- 要求仕様がないのに見積と無理な一括受注
- コンサルが業務分析し、後はIT開発業者でズレ
- チームメンバーのスキルが低く、議論から逃避
- 開発は2次3次外注(仕様理解のズレと士気)
- スケジュール、コスト優先で決めごとが後回し、テスト不足
- ツール(ミドルウェア)の複雑化/問題解決に時間

：

II. 概念データモデル適用にあたって

■顧客主体で概念データモデルが描ければ情報システムは8割形成功

顧客主体：経営者、IT部門、利用者(利用者参画でなくてはならない)、IT業者はあくまで支援

■概念データモデル適用のハードル

□利用者参画型でプロジェクト体制づくり

□概念データモデル設計指導者

□「もの」と「こと」の整理

□各モデルの作成は訓練が必要？(個人的な見解)

静的モデル……………○(これができなければシステムはできない?)

動的モデル……………△(実体種類の派生と処理内容補足で複雑化?)

組織間連携モデル…○(できそう)

機能モデル……………処理記述を書くか?位置づけ?

□現場利用者が議論を尽くせるか(これが一番大切)

■情報システムへの切り出しと引き継ぎ(情報処理形態)

■アプリケーションパッケージの適用マッピングをどこで意識するか?

Ⅲ. 情報システム開発への思い

■システム開発は短期決戦がポイント(5ヶ月位、プロトタイプ、ソフトウェアJIT)

- 利用者参画体制維持 (レビュー、テストデータ、移行準備等)
- 画面、帳票はプロトタイプで早期にレビュー
- 間延びすると、要求仕様が変わり易い

■パッケージ適用は機能処理単位がよい

- 業務処理の中でどの部分に適用するか明確化(全面適用にすると概念データモデルまでもどることになる。

■仕様書は必要最小限

- 仕様書を多く作ると工数がかかる。すぐ陳腐化する。

■できればアジャイル開発(ウエイト付けした段階的开发)

- 少数精鋭
- 仕様、スケジュール、問題、課題等プロジェクトメンバ全員で共有化および対策
- 厳しい制約(特に予算)の中で最適化

以上